
かみ かみ

蘭 奏芽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

かみ かみ

【Nコード】

N3617K

【作者名】

蘭 奏芽

【あらすじ】

貴方の命を救う代わりに私の願いを叶えてください。と、死にかけの少年を救ったのは見た目十二歳くらいの神様（アニメ好き）だった。話を聞くと、一週間で世界が大変なことに！？二人は力を合わせて世界を救うための戦いを始めるのだった。

ブローグ

——こんな経験をしたことはないだろうか？

例えば、道を歩いていたら、いきなり横から自転車が飛び出して来た。とか、学校でサッカーをしていたら、死角から急にボールが飛んできた——みたいな、自分の意識の外で突然何かが起こったなというような経験だ。

誰だって一度は覚えがあるだろう。特に珍しいことでもない。

飛び出して来た自転車を避けたり、飛んできたボールを受け止めたり、そんな普通の対処をしたことがあるはずだ。

——なら、同時にこんな経験をしたことはないか？

飛び出して来た自転車を避けようと、飛んできたボールを受け止めようとしたが、突然のことに身体が反応できなかった。

驚きのあまり何もできず、自分の身に起きた危険を回避することができなかった——そんな、突発的な出来事に対処が間に合わなかったというような経験だ。

危ないという周りの声は聞こえるし、自分では避けられるつもりでいる。

だが、頭ではわかっていても、身体が動いてくれないのだ。

“わかっていても動くことができない”——こういう時、咄嗟に身体が動くのは、普段からそういう突発的な事態に慣れている人間か、頭で考えるより先に身体が動く直感的な人間のどちらかだろう。ちなみに俺は自分で言うのもなんだが、比較的、頭で考えてから行動するタイプだと思っているし、正直今言ったような咄嗟の行動

が出来る人間ではないと思っている。

——だからこそ、俺は最初自分の取った行動の意味が理解できなかった。

「一騎!?」

危ないと思った時は、既に彼女を突き飛ばした後だった。

続いて耳に入ってきたのは、周囲に響き渡る大きなブレーキ音。そして、背に感じる何かがぶつかるような強い衝撃。

自分の身体が何かに跳ね飛ばされ、鈍い音と同時に地面に叩きつけられる。

——痛みはなかった。

代わりに、焼けるような熱さと身体から流れる血の感触が、徐々に俺の意識を奪っていく。

「一騎！　しつかりしろ、一騎!?」

「あ………?」

頭を強く打ちつけたせいか、上手く考えがまとまらない。

一体、何が起こった？　俺は、何をしてたんだっけ？

「……あ、ああ……やっちゃった。人を殺しちゃった……っ」

「馬鹿者！　うるたえてる暇があるなら早く救急車を呼べ！」

——ああ、そうだ。事故にあっただ。

学校から家に帰る途中、信号を無視して突っ込んできた車に轢かれた。

痛みは感じない。

おそらく、地面に身体を叩き付けた影響で痛覚が麻痺してしまっ

ているのだろう。とはいえ、流れている血の量から考えて、お世辞にも軽い怪我とは言えそうになかった。

「おい一騎、私の声が聞こえるか？ 一騎！？」

「……あ……葵……ぶ、無……？」

「あ、ああ無事だ。お前が庇ってくれたおかげだ」

瀬名葵——星南高校二年、生徒会長、俺の幼馴染。コイツを庇って俺は車に轢かれた。

とはいえ、実際はただ突き飛ばしただけだ。

庇ったといえば聞こえはいいが、咄嗟に手が出たのは偶然に過ぎない。声を聞く限り大丈夫なようだが、頭を打った影響か視界が霞んで無事な姿は確認できなかった。

「そ、そんなことより自分の心配をしろ！ もうすぐ救急車が来る。それまで——」

顔は見えないが、どうやら本当に大丈夫そうだ。

心配をする彼女の声からは不安こそ伝わってくるものの、痛みを耐えているような様子は感じられない。

「そ……ん……なに……ッ！——ッ！」

「一騎！ 無理をするな。もう少しで助かるから」

そんなに心配するな——と口にしようとしたが、声が上手く出せなかった。

自分では確認できないが、どうやら今の俺はかなり酷い状態らしい。

思えば、長い付き合いだが、こんなに焦っている彼女を見るのは初めてだ。

「……………くっ……………ッ……………！」

少しでも不安を取り除いてやりたくて「大丈夫だ」と腕を上げようとしたが、やはり身体はいうことを聞いてくれなかった。

（……………死ぬのか、俺は？）

自分の状態を振り返ったせいか、急に怖くなってきた。

緊張と恐怖から心臓と呼吸の音がやたら大きく聞こえ、逆に周囲の音が何やら遠くのもののように感じられる。

「あ…っ、ぐ……………」

少し息がし辛いな……………と思った瞬間、意識に霧のようなものがかかる。

段々と視界が歪んできた。さつきから視界は霞んでいたが、物の輪郭はぼんやりと把握できていた。

だが、今はまるで真っ白なフィルターがかかったように目に映る景色は色彩を失い、世界が回って見える。

おそらく、肉体の機能が低下しているせいで、意識が死へ向かうとしているのだろう。

とはいえ、このまま素直に死んでやるほど俺は諦めの良い人間じゃなかった。

「く……………ッ、ぐっ……………が……………っ！」

無駄だということはわかっていた。だが、抵抗を止めたらそれで

終わりだ。

少しでも身体を動かそうと、声を出そうと試みる。
だが、動かない。口からは呻き声しか出ない。血も止まらない。

——あらゆる全ての現実が、俺を殺そうとしていた。

(く、そ……)

死にたくない。

まだ死ねない。

約束があるんだ。

生きて果たさなきゃならない約束が——

(俺は、こんな所でくたばってやる訳にはいかねんだよ……っ！)

だが、いくら頭で否定しても、死神の足音はすぐそこまで迫っていた。

身体が震える。恐怖からではない。血液不足による体温の低下——精神的なものではなく完全に肉体的なものが原因だろう。
どんなに否定しようとも、直感的に俺の身体は死の気配を感じ取ってしまっている。

「一騎……？　おい、一騎！　しっかりしろ！　駄目だ、死ぬな！
一騎、一騎——」

声が、聞こえなくなってきた。

もう、目も開けていられない。

意識の糸が、切れる——

（生きたい……）

生きたい……だが、運命がそれを許してくれない。

身体は、既に限界を迎えていた。

力が、魂が、身体から抜けていく。

絶望の拒絶も、生への渴望も、全てが無に帰そうとしている。

どんなに望んでも、避けられない絶対的なものが俺を迎えようとしていた。

そう、人間にとって、唯一、平等に訪れるもの——『死』が。

『——見つけた』

そして——身体が、意識が、死の沼に落ちそうになったその瞬間、
その『声』は聞こえた。

第一話 神様と契約

「おはようございます」

目が覚めて、最初にかけられた第一声は至極当たり前の挨拶だった。

とりあえず「おはよう」と返しながら、ふと視線を上に向ける。視界には一面の白い天井が映っていた。

次に視線を下へ向ける。新たに視界に入ってきたのは自分にかけられた毛布とベッド、そしていつの間にか着せられていた入院着のような服に——『美少女』だった。

僅かに漂ってくる薬品の匂いや今の自分の姿から考えるに、ここは病院で間違いないだろう。

どうやら、俺は一命を取り留めたらしい。

正直、確実に死んだと思ったのだが、神様は俺を見捨てなかったということか。

「……………」

改めて目を強く瞑り、ゆっくりと開く。

さて……今、俺は自分の周囲の状況を確認した訳だが、視界に何かおかしなモノが映ったのは気のせいだろうか？

いや、正確に言えば今もまだ映っているんだが——何だ、これは？普通に考えれば、ここは助かったことを喜ぶべき場面だ。俺だっ

て生き延びたことは素直に嬉しいし、喜びを噛み締めたいと思う。だが、その前にどうしてもこの状況——今現在、俺の上に乗っている物体……そう、この『美少女』について詳しい説明を求めたか

った。

「寝癖が付いてますよ」

と、俺の髪をぺたぺた触る、紅と白が特徴的な妙に古めかしい着物を纏った小柄な少女。

腰まで伸びた澄んだ空色の髪が、整った容姿と相まってその可愛さを際立たせている。

何度も言うが、『美少女』——と言って問題ないだろう。

見た感じ、歳は俺よりも少し下、十二前後といった所か。若干浮世離れたその姿は、普通の人にはない神々しさすら感じさせる。

——そんな彼女は今、何故か俺の上に乗っていた。

何を言っているのかわからないと思うが、安心しろ俺も何が起きているのか良くわかってない。

とりあえず、どこかで会ったことがあるか記憶を掘り返してみたが、こんな目立つ少女に出会った覚えは微塵もなかった。

つまり俺は今、病院のベッドの上で見知らぬ少女に馬乗りにされている——ということだ。

「……何だ、この状況？」

目が覚めたら、自分の上に知らない女の子が乗っていた。

どういう状況だ？ 衝撃的過ぎて笑い話にもならねえ。実はまだ俺は意識を失っていて、ここは夢の中なんです——とか言われた方がまだ納得できる。

いや、待て。もしかしたら、もうここは死後の世界で俺は今まさにあの世で目を覚ましたのか？ やけに現代風な世界だが、それならこの妙な少女が俺の上で馬乗りになっている現状も辛うじて納得

でき――

「――って、できる訳ねえだろ！ 誰だ、お前！？」

ほつぺたを抓るまでもなく、ここは現実だった。

なら、何で俺の病室に会ったこともない女の子が居る？ しかも、何で当たり前のような顔して俺の上に馬乗りになってるんだ！？

「あはは。それだけ元気なら、もう大丈夫そうですね」

「いや、大丈夫じゃねえよ！？ 全然、大丈夫じゃないよ！」

この奇怪な状況をどう見たら大丈夫と言えるんだ、お前は！？

「？ 怪我はもう治ってるはずですけど……？」

はい？ 何だ、怪我って？ そんなことはどうでもいいんだよ。
別に俺はどこも怪我なんてして――

「……え？」

――怪我が、ない？

ふと我に返ってみると、痛みをまるで感じなかった。

身体を動かしても、傷に響くということがない。

だが、それはおかしい。俺は交通事故にあって大怪我をしたんだぞ？ 当然、大怪我だってしたし、自分の感覚では死にかけてすらいた。

常識的に考えて、そんな命に関わるような怪我をして、すぐに痛みが消える訳ない。

痛み止めの影響か？ いや、待て。良く見てみれば、俺の身体には包帯所か絆創膏一つない――否、それ以前に治療をした形跡がな

かった。

「……………どういうことだ？」

現実感がなさ過ぎる。本当に夢の中にいるんじゃないだろうか？
いや、例えこれが現実でも夢でも、答えは目の前の少女が持つて
いるはずだ。

「なあ……………」

「契約に従い、貴方の命は助けました。次は私の番です……………では、
行きましようか。まずは犯人の居所を探さないと——」

「——待てや、このチビ」

「わ、っひゃあああああああつ！ か、髪を引っ張らないでくだ
さいっ」

「俺の上に乗ったまま器用に後ろを向いたお前が悪い。ってか、お
前誰だよ？ 何で俺の上に乗ってんだよ？」

「質問の度に髪を引っ張らないでください！ 答えます！ 答えます
すから！」

若干涙目になりかけていたので、素直に手を離してやる。
すると、人の上で暴れまわっていた少女は、まるで逃げるように
ふわっと俺の上から浮かび上がった。

「……………ん？」

浮かび上がった？

浮かび上がった！？

「う、浮いたあああああああああああああつ！？」

「そりゃ、曲がりなりにも神様ですからね。浮くくらいしますよ」

「何を言ってるんですか、当然のことですよ？」——と言わんばかりの態度に、一瞬、俺の方が間違っている気にさせられたがそんな訳がなかった。

ワイヤーが何かで吊り上げてるのか？

いや、初対面の俺にそんなことをする理由も意味もない。なら、何でこの少女は当然のように浮いているんだ？

——いや、待て。それもいろいろ問題だが、今彼女はなんと行った？

「……神、様？」

「はい。そうですけど」

「え、神様って……あの神様？」

「えっと……どの神様かはわかりませんが、正確には護神ゆずりがみと言います。その中でも、私は奇御霊くしみたまに属する神ですね」

ゆずりがみ？ くしみたま？

何を言ってるんだこの子は……もしかして電波な人か？

「人じゃなくて神様です。後、電波とかじゃないです」

「!？」

え？ 今、俺……声に出してたか？

「いえ、今の私と貴方は魂が一次的に融合しているので、思考の一部を共有できるんですよ」

「へ？ 魂が融合？ 思考の共有……？」

「はい。その気になれば、口を開かなくても会話が出来ますよ」

そう言つと、彼女は空中で待機していた状態から、今度はベッドの側の椅子へと着地する。

『どうですか？ 聞こえますか？』

「！？」

確かに、彼女は口を開いていなかった。だが、声はしっかりと聞こえた。

いや、聞こえたというのは適切ではない。耳というより、頭に直接響くような感覚だった。

「……………」

——言葉が出ない。まさに文字通りだ。

風景的に見れば普通に戻ったのに、状況は先程の馬乗り状態よりも不可解になっていた。

とはいえ、それは当然のことだ。いきなり宙に浮くわ、自分は神様だとか言つわ、テレパシーは使つわ、拳句の果てに俺の魂が自分と融合している——なんて言われた日にゃ、どう反応すればいいかわからなくなる。

かといって現実問題、普通の人間には出来ないことをいくつもされている以上、彼女の言葉を嘘だと否定することも出来なかった。

「オーケー、わかった。いや、わかってねえけど……とりあえず、落ち着こう」

「？」

「お前の神様云々は置いておいて……まずは現状を把握しよう」

今の状況は力オス過ぎる。整理すれば現状も少しは落ち着くだろう

う。

まず、ここは病院で間違いない。事故の後、俺は奇跡的に助かってここに運ばれてきた。ここまでは良い。

次に、目が覚めたら、俺は自称神様に馬乗りにされていた——つて、いかん。ここまでで既に意味不明だ。

「奇跡的についていうより、私が治したんですけどね」

「へ？」

「貴方の怪我ですよ。完治してるはずですけど？」

確かに。痛みがない所か、普段と何も変わらない。

この子が治した？ あの大怪我を？ どうやって？

「契約したじゃないですか。……覚えてませんか？ 貴方の命を救う代わりに、私の願いを叶えるって」

そういえば、意識を失う直前、誰かの声を聞いたような気がしなくもない。

その後のことは良く覚えていないが、もしかして俺は本当の神様に助けてもらったのか？

「え？ 何？ マジでお前神様なの？」

「はい。そうですよ」

寸分の迷いもなく、笑顔で肯定する自称神様。

おいおい、即答かよ。普通に考えれば、「私は神様です」なんて真顔で言う奴は頭がおかしいと思われるぞ。

とはいえ、これまでの超現象に加えて、あれだけの怪我が治ったという事実——流石に、冗談とは言い切れなかった。

「マジで神様なのか……」

俺の中の神様のイメージっていえば、杖とか持った爺さんみたいなのだっただけど……想像は所詮想像ってことか。

確かに、格好だけならそう見えなくもない。けど、やっぱりどう見ても、普通の人間にしか見えねえぞ。

(……でも、コイツは本当の神様で、俺はコイツに命を救われたんだよな)

って、待てよ。なら、何でコイツは俺の上に馬乗りになってんだ？

「……いや、待て。それもそうだが、それ以前に何で俺なんかを助けたんだ？」

この神様の存在を認めるなら、一番最初に疑問に思うべき点だろう。

普通に考えて、俺を助けて彼女にメリットがあるとは思えない。神様が気まぐれに俺を助けたという線もあるが、それなら彼女が今ここにいない必要はないはずだ。

「えつとですね……」

「どこから説明したものでしょうか……」と、悩む神様。

「えつと、さつき……契約について話をしたのを覚えてますか？」

「契約……？」

そつえば、俺の怪我を治すのに契約をしたとか言っていたよう

な気がする。

「確か、お前が俺の命助けた代わりに、俺がお前の願いを叶える……とかなんとか？」

「はい。そのなんとかです」

記憶にはないが、あの時の俺は生きるためなら悪魔に魂すら売ったはずだ。彼女の言う通り、俺はその契約とやらをしたのだろう。成程な、何か俺にして欲しいことがあったからこの子は俺を助けたのか。結果として俺は生き永らえ、彼女は目的を果たすためにここにいる。

「それですね。貴方には、私の依代を探す手伝いをしてもらいたいですよ」

「依代って……神様が宿るとかなんとかのアレか？」

「はい。人間的に言うとかみみたいなものです」

「その依代を無くしたから俺に探すのを手伝えと？」

「いえ、正確には盗まれた依代を取り返して欲しいんです」

「盗まれた？」

おいおい、神様の依代なんてそんな簡単に盗めるものなのか？

「そんなわけないじゃないですか。私の依代には結界が何重にも張ってあって、普通の人間には認識すらできないんですよ」

「じゃあ、誰が盗んだんだよ？」

「わかりません。私の結界を破れるのは死神か同じ護神くらいのものだと思うんですけど……」

「……………死神ね」

まあ、神様が存在している以上、死神がいても別におかしくない。

……ってことは、もしかして天使や悪魔みたいな存在も実在するの？ 人間に白い羽が生えたような、黒い身体に角や尻尾が生えた感じのが。

なんか格好良いな。一度でいいから見てみたいかも――

「――って、待て待て。神様ってお前以外にも居んの？」

「はい、私を含めて四人。それぞれ、役割を持っています」

「役割？」

「護神っていうのは、本来、星を統べる存在なんです。土地神って言えばわかりやすいですかね？ 詳しく説明すると長くなるので割愛しますが、私は主に星や人間の生命を司る護神なんです」

良くわからんが、ファミレスで料理を作る係と持っていく係があるように神様にもいろいろ役割分担があるのか。

――って、待てよ。もし、コイツが生命を司る神様じゃなかったら、依代が盗まれなかったら……俺はそのまま死んでいたってことか？

「あつぶねえ！ ……お前の依代盗まれて本当によかったわ」

「良くないですよ！ 依代がないと私は殆ど力が使えないんですよ！ ただでさえ、貴方の傷を治すのに残ってた力を使ってしまったのに……」

「おお……そりゃ、悪かったな」

「私達、護神は四人の力で星を制御してますから、私が今のまま力が使えないと世界のバランスが崩れてしまつんですよ」

「はあ、バランスねえ……」

「多分、後一週間かそこらで星の生態が変わるんじゃないですかね。不思議生物が現れたり、地震や台風みたいな異常気象が起きたり……」

「……ん？」

「環境とかも変わって、人間が住める星じゃなくなっちゃうかもしれないんですよ！」

「なくなっちゃうかもしれないんですよ！——じゃねえ！ 大問題じゃねえか！」

そんなに大事だったの！？ てか、後一週間とか殆ど時間がねえじゃねえか！

「ってか、何で盗まれたんだよ！？ お前、依代……ってか家出て何してたんだよ！？」

「え、あ、いや……それは……その……」

何やら、小声でこによこによ言っているが良く聞き取れない。

「えっと……少し、地球の様子を見て回ってまして……」

「地球の様子？ 神様なら、特殊な力で地球の中とか見えるんじゃないのか？」

「見えますけど……その、実際に参加したかったと言いますか……」
「参加？ 何にだよ？」

「……アニメフェスタとか夏コミとか」

「……」

「……」

「……アニメ、フェスタ？」

あれ、おかしいな。事故の後遺症で耳がおかしくなったかな？

「——って、んな訳ねえだろうが！ 何だ、アニメフェスタって！？」
「お前、神様だろう！？」

「神様がアニメ好きじゃいけないんですか！？ アニメは人間の作った文化の中でも最高のものですよ！」

「お前、本当に神様なの！？　ってか、神様が人間の文化で一番評価してるのがアニメとか笑えんわ！」

「アニメを馬鹿にしないで下さい！　『マジカル天使　ココロちゃん！』は神アニメですよ！！」

「知らんわ、そんなもん！　お前、さっき自分のこと星や人の生命を護る神様とか偉そうに言ってそれかよ！？」

「いいじゃないですか！　神様だって、息抜きしたかったんですよ！」

「それで、自分の家盗まれてりや世話ねえわ！」

「だから、探すの手伝ってくださいつて頼んでるじゃないですか！」

「アニメのイベント参加してて家盗まれたんで探すの手伝えとか、お前、言ってて恥ずかしくねえの！？」

「探さなきゃ地球が大変になっちゃうんですよ！　そんなこと言ってる場合じゃないでしょう！？」

「ごもつとも！！」

と、いう訳で、少し白熱しすぎた俺と神様は一旦落ち着くことにした。

「話を戻そう。俺達が争っても何も解決しない……」

「……そうですね、無意味な言い合いでした」

とりあえず、今までの話の要点を纏めてみよう。

まず、この神様はうっかり散歩中（？）に家を盗まれた。

家を盗まれた神様は一人じゃ何も出来ないなので、助けを求めることにした。

死にかけの俺を助けて契約。さあ、二人で家を取り戻そう！

「……何で俺？」

思えば、まずそこからだった。

わざわざ力を使って俺を助けてまで、何で俺と契約したんだ？

「資質の問題です」

「資質……？」

「私達、護神は依代がないとこの地に身を留めて置けないんです。簡単に言いますと、家がないと死んじゃうんですよ」

「ふむ」

「なので、今、私はあなたの身体を仮の依代にすることで、一時的に家の代わりにしてるんです」

「で、その資質が俺にあったと」

そういえば、さっきも魂が融合しているとか、思考を一部共有できるとか言ってたっけ。

成程、だから死にかけの俺を助けてでも、契約を交わさなきゃいけなかった訳だ。

「本来なら、こんな無理やりな方法ではなく、ちゃんと順を追って力を貸してもらうつもりだったんですが……」

「話をする前に俺が死にかけたと……」

「はい。私が護神としての力を使うにはルールがあって、あの時、貴方を助けるには契約をするしかなかったんです」

聞けば、神様は自分の意思で自由に力を使えない——使うことが許されないのだそうだ。

例えば、一人の少年が怪我で死にそうになっていて、それを助けたとする。その少年は神様のおかげで生き延びることができた。けど、もし同じ時間、別の場所で同じ目に遭っている女の子がいてその子が助からなかったら不公平になってしまう。

神に見放されたと言えばそれまでだが、神様が自由に現世の事柄

に介入することで幸福になる人と不幸になる人が増えるのは、今の世の中を混乱させてしまうことになる。

人間の世界は人間が作るべきものだ。

いくら、奇跡で救われる人がいても、その内、その奇跡に頼らねば生きれなくなってしまう。命令されなければ動かない機械のように、神様なしでは生きられなくなる。

だからこそ、力を使うには厳密なルールがあるのだ。

それが、契約——神様が起こした奇跡の分の対価を、その人間が払うことで帳消しにする。神が唯一その力を自由に使える方法——いふなれば等価交換だ。普通に考えれば、奇跡を起こす以上、そんなことは至極当然のことに感じられるだろう。

だが——

「？ その言い方だと契約がヤバイものみたいに聞こえるぞ？」

——何のリスクもなしに契約なんてものができれば、そもそも力を使うルールなんて必要がないわけ。

「神の契約は絶対です。破れば、その身に災いが降りかかります」

「……………」

「……………」

「……え？ つまり、俺がお前の依代を見つけれなかったら？」

「……契約違反で、貴方に災いが降りかかります」

「……なん、だと？」

「ちなみに災いって……どんな？」

「私の知っているのですと、契約を破棄した人間は人間としての存在を剥奪される……とかですかね」

「人間としての存在を剥奪される？」

「人間でも霊でもなく、いわば概念としてこの世界に固定されるんです。例えば、今貴方は病室にいますが存在を剥奪されれば、その姿は他の人には見えません。貴方はそこにいるけど、誰にも見えません。何にも触れません、何も出来ません。貴方という存在は世界に在るにも関わらず、貴方という存在は消えてしまっただけです」

「つまり、何にも出来ない透明人間になっちゃうってことか？」

「はい……あくまで私が知る限りは、ですが」

他にもあるかもしれないってことか。けど、多分内容はそこまで変わらないだろう。

神様との契約を破れば、死ぬよりも辛い罰が下されるってことだ。

「……すみません」

「別に、お前が謝ることはねえだろ」

あの時、生を望んだのは俺だ。

いくら他に選択肢のない無理やりな契約でも、俺が生きるために自分で選んだんだ。

それに、契約を護りさえすれば何の問題もない。用は後一週間でコイツと一緒に盗られた依代を盗り返せば良いだけの話だ。

「むしろ、礼を言わなきゃいけないくらいだろ」

本当は死ぬはずだった命を救って貰ったんだ。

その借りを返すためなら、依代の一つや二つ取り返してやるよ。

「まあとにかく、これからよろしく頼むぜ神様………っていうか、お前名前は？」

「神様に名前なんかあるわけ無いじゃないですか」

「またしても、「何を言ってるんですか、当然のことですよ？」——と言わんばかりの態度だ。」

「とはいえ、名前がないと呼ぶときに困るだろう。」

「ははっ。じゃあ、俺が付けてやるよ。」

「何か、犬や猫に名前を付けるようなノリですね……嫌な予感がするんですけど？」

「うん、俺もそう思う。」

「我ながら、いい笑みを浮かべてるんだろうなあ。」

「お前の名前は、お前の好きな『マジカル天使 ココロちゃん！』に因んで……『ココロちゃんだ！』」

「ちょっ！？」

「うん、我ながら可愛くて良い名前だな」

「や、止めてくださいよ！ 何でそうなるんですか！？」

「ちなみに俺の名前は神風一騎だ。よろしくなココロちゃん」

「だから、ココロちゃんは止めて下さいってば！」

余談だが、何故彼女が俺の上に乗っていたかというところ……『ココロちゃん曰く、依代が新しくなったせいで離れるのが難しくなったかららしい。』

今は慣れたのか、この部屋くらいまでの距離なら俺から離れられるが、基本的には俺の側から離れられない——と、いうより離れてしまうと存在を維持できないとのこと。

まあ、いろいろ言いたいことは山程あるが——全て纏めると、俺は神様と契約して地球（俺）の平穩のために盗まれた依代とやらを探すことになっちまったということだ。

第二話 幼馴染は天才児

ふと時計を見てみると、俺が事故にあってから二時間程しか経っていないことがわかった。

ちなみに、神様は『ココロちゃん』と呼ばれるのはどうしても嫌だというので、漢字一文字で『心』と呼ぶことにしたのだが――

「呼び方は変わってないじゃないですかー！」

――と、せっかく俺がいい名前を付けてやったのに、ぎゃあぎゃあとうるさく騒ぎまくるので、カチンと来て絶対に『心』以外の名前は付けないと宣言してやった。

これ以上、文句を言っても俺が聞かないとわかったのか、心も渋々ながらこの名前に妥協して一件落着。脱線していた話を元に戻すことにした。

「で、だ。これからどうする？」

「向こうの目的は大体読めます。依代を破壊するのではなく、奪ったということは私の力を狙っているのでしょう」

本来なら、依代と護神はセットだ。

依代を手に入れること＝護神の力を手に入れるという図式になる。だが、このアニメ好きはその定石から外れていたせいで、偶然にもその中身を奪われるのだけは防げた。とはいえ、依代と一緒にいれば奪われる前に迎撃できたはずなので誉めるべき所ではない。

「相手にしてみれば、刀を盗もうとしたら鞘しかなかったみたいな

もんだな」

「そんな感じですね……」

本体がなければ、依代に価値はない。

いくら凄い神様の家でも、そこに神様がいなきゃ力は使えないんだ。

「……私の力も一騎さんの治療で消耗してますし、こちらからできる探索には限りがあります。基本的には向こうから仕掛けてくるのを待つ形になりますね」

「仕掛けてくるって、まさか拳と拳で戦ったりとかするの？」

「おそらく……話し合いで解決できるなら、それが一番なんですけど」

「マジかよ……」

常識的に考えて、神様の結界を破壊するような相手に普通の人間が戦えるわけがない。

俺も護身術として格闘技を覚えてはいるが、それでも素人に毛が生えたレベルだ。まず、瞬殺されるだろう。

「大丈夫です。私が力を使って、一騎さんの基本能力を底上げします。ゲームで言う強化の魔法ですね」

「え、そんなことできるの？」

確か、神様の力を使うにはルールがあるとか言ってたか？

「護神としての能力ではなく、普通に力を使うだけですから。わかりやすく言いますと、私の神様の力は特性やスキルみたいなもので、普通の力は魔力で使う魔法みたいなものです」

「成程な、俺を助けた時に使ったのはスキルで、戦うのに使うのは

魔法ってわけか」

スキルは適性がないと使えない。けど、魔法なら自由に使えるわけだ。

とはいえ、スキルも魔法も発動に使うMPは同じのことで、依代もなく力も消費している今はそんなに大きな魔法は使えないらしい。

「そう聞くと、マジでゲームだな」

「とはいっても、私は攻撃魔法的なものは使えない白魔導師みたいなものなんですけどね」

「……補助と回復がメインってことか。まあ、お前は星や生物の命を司る神様だしな」

実は攻撃が得意なんですよ。とか言われたら逆に驚くわ。

「戦いは一騎さん頼りになってしまいますけど、補助や防御、回復でサポートすればそうそう負けないと思います」

「荒事は俺が担当か……まあ、契約だからしょうがねえ。お前が補助に回るのなら、とりあえず死ぬことはないだろ」

「勿論です！ 流石に、命までかけるとは言いませんよ。それに、一騎さんを死なせるようなことになれば、私の契約に違反することになりますし……」

——“天寿全つとうするまで、俺を死なせない。代わりに、護神の依代となり彼女の願いを叶える”。

これが、正確な俺と彼女の契約内容だ。

普通に考えれば、死にかけてた俺を助けるだけで充分と思うだろうが、心曰く、互いの契約内容が対等でなければ契約は結べないらしい。

神様の家代わりになるのは、俺の思っている以上に大変なことらしく、その上俺は彼女の依代を探す手伝いを要求されている。寿命まで俺の身を護るくらいでないと対価としては釣り合わないらしい。

「一騎さんは、私が必ず護りますよ」

「でも、その前にいろいろ準備しないといけないですけどね」と笑顔の一言。

どうやら長い間生きてきただけあって、心もこういう戦いは初めてではないらしい。

聞けば、数百年前にも何度か護神の力を狙う術士達と戦ったことがあるとのこと。

「ははっ、そりゃ頼もしいことで」

心の余裕からみて、結構何とかかなりそうだった。

まあ、俺にしてみれば、事故に遭おうと、戦うことになるうと、死ななければ何の問題もない。

俺は死にたくない。生きて護らなきゃいけない約束があるからだ。だから、今回の件は確かにいろいろ大変だが、今後の生命保障が付いた分、ラッキーとも思っていたりする。

「オーケー、わかった。……大体の事情は飲み込んだし、説明は終わりでもいいか？」

「そうですね、後はとにかく動かないことには始まりません」

それはそうだ。話も終わつたし、そろそろ病院の先生を呼んで退院させて貰おう。

それから、依代を取り戻すに当たって必要な準備をして行動開始だ。

「……ふむ。とはいえ、相手が動くのを待つというのは些か後手過ぎると思うが？」

「まあ、それは俺も思う」

「ですけど、探知の範囲に依代の反応がない以上、私の力ではどうしようも——」

——ん？

「ならせめて、相手が攻めてきた時のシュミレーションくらいはした方がいいだろう？　ぶっつけ本番など愚か者のすることだ」

「……………」

「……………」

「ん？　どうした、固まって？」

「葵サン、イツカライタノ？」

「お前が『マジカル天使　ココロちゃん！』とか叫んでる辺りからだ。ノックもしたし、声もかけたが、返事がなかったので悪いが勝手に入らせてもらった」

つまり、俺が心をからかった時には既にいたのか。

ってか、話半分聞かれてんじゃないかねえか。やべえ、心のことどう説明すればいいんだ？

話半分聞いてたってことは、神様云々も微妙に聞いてただろうし、下手な誤魔化しはコイツには通じないぞ。

「大丈夫ですよ、普通の人間に私の姿は見えませんが。結界を張ってますから」

毎度お馴染みの「何を言ってるんですか、当然のことですよ？」と言わんばかりの笑顔。

思えば、神様の姿が見えないというのは、アニメとかゲームの世界ではお決まりのことだ。

まあ、ここは現実だけど……とにかくそのお決まりのおかげで助かった——って、待て。つまり、葵には俺が一人で厨二みたいなこと言ってるように見えてるってことじゃねえか！

「で、お前達は何の話をしていたんだ？」

「いや、待て葵。勘違いするな、俺は別に厨二って訳じゃなくてだな……って、お前達！？」

おい、心！ お前の姿は見えないんじゃないのか！？

「……………」

「……………」

「……あれ？」

「あれ？ じゃねえよ！？」

「おかしいですね……」と言いながら、心は葵の前で手を上下に振る。視線はばっちり合っていた。

「……ふむ。状況から察するに、本来なら私は君が見えてはおかしいのか？」

「そうですね。結界は正常に作動してますし、見えるはずないんですけど……」

「それは、絶対に見えないものなのか？」

「いえ、人間でも素質……わかりやすく言いますと靈感みたいなものがあれば見えます」

「なら、私がそれに該当するんじゃないか？」

「なんですかね？ それほどの力は感じないんですけど……」

「先程の会話で、君は力が弱っていると言っていたな。その影響で、

感覚が衰えているのではないか？」

「可能性は否定できませんね。現に貴女の力を見落としているみたいですし……」

……アレ、おかしいな？

話半分しか聞いてないはずなのに、何か俺以上にこの状況に順応してないか？

「そうでもない。殆ど推測の域で話をしているからな」

「……お前まで心読むなよ」

「お前がわかりやすい顔をしているだけだ。……ああ、それと今の会話で、彼女がお前の心を読むことが出きるというのもわかったぞ」

「ふわー……凄いですね」

「……まあ、コイツの頭は普通の天才のレベルを軽く超えてるからな」

「それはいくら何でも大袈裟だ。誰だって、一言二言の会話で充分相手のことを理解できるものさ」

「そうなんですか？」

「んな訳ないだろ。……お前はコイツと話しててコイツのことなんかわかるか？」

「あー……頭が良いってだけはわかります」

「世辞は良い。それよりもお前達の事情を聞かせて貰いたい」

話半分で大体の状況を推測できてはいても、やはり内容が気になるんだろう。

とはいえ、戦いの危険がある以上、一般人である葵を巻き込みたくはない——んだけど。

「……私は、お前達の役に立つと思うが？」

「えっと……」

「……どうします？」と、いう視線を送ってくる心に頷きを返す。正直、葵を巻き込みたくないが、隠すにはもう手遅れだろう。むしろ、下手に隠そうとすれば、コイツの正確からして勝手に首を突っ込んでくるのは確実。それで危険に巻き込んで、話しても話さなくても同じだ。

俺の心情を察したのか、苦笑いを浮かべながら心は葵に俺にした時と同じ説明を始める。……面倒なことが一つ増えちゃったな。

「……ふむ、成程な。後一週間でその依代とやらを見つけないと、星の生態バランスが崩れて地球は人間が住めない星になる上、一騎は契約を果たせずその身に災いが降りかかると。すると、現状問題になるのは――」

流石に二度目とあって、心の説明もかなりスムーズなものだった。要点を聞くだけで大まかの状況を把握してしまう葵の理解力もあって、五分と経たずに説明は終わったのだが、流石にそう簡単に受け入れられることではないのか、葵は聞いたことを頭の中で反芻しながら何やらぶつぶつと理論的なことを呟いている。

「とはいえ、俄かに信じられることではないな……」

葵の視線は、目の前で宙に浮かんでいる心に向けられていた。言葉で証明するより実際に見た方が早いと思い、俺が宙に浮きながら説明するように頼んだのだ。

「理屈屋のお前としては、まだ納得できないか？」

「……そうだな。——と、言いたい所だが、残念なことにむしろ得心がいった。お前は知らないだろうが、私はおそらくその契約の現場に立ち会っている」

「なに？」

「お前が意識を失った直後、お前の身体は一瞬眩い光に包まれた。今まで気のせいだと思ったが、アレがお前達という契約だったのだろっ」

アニメやゲームじゃあるまいし、人間の身体がそんな簡単に光る訳がない。

葵も、最初は気が動転していたこともあって、光の反射で錯覚を起こしたと思っていたらしいのだが、いざ救急車が到着して応急処置をしようとしたら俺の怪我は既に完治していたというのだ。

何かの間違いだと思っただが、いくら調べても俺の身体には何の異常もなく、病院での精密検査でも何の問題も見当たらないと担当の医師も匙を投げ出したらしい。

「結局、お前が目覚めるまで医師の言葉も半信半疑だったが、今の説明が本当なら全て納得がいく」

確かに、大怪我が一瞬で治るなど、それこそ神にしか出来ない奇跡だ。

身体が光ったのは、おそらく心が神様の力で俺の怪我を治療した時のものだろう。

「——それに、お前が信じたのなら私も信じるさ」

「……当然のことだろう？」と、言わんばかりの絶対的な信頼の目。

これだから困る。コイツは昔から、俺に対してだけは疑うことをしない。

「……俺としては信じて欲しくなかったんだけどな」

「残念だがそれは無理だな……」

幼馴染暦十七年、お互いのことは家族のように知り尽くしていた俺がコイツを信用しているように、コイツもまた俺のことを信じてくれている。でも、だからこそ、葵にはこんな危険なことに首を突っ込んで欲しくなかった。

「何より、お前の現状の原因は私を庇ったせいだろう？ 責任は私にある」

「……そんなことを言ったら、原因はトラックの運転手だろ」

「罪の意識の問題さ。大人しく協力させろ、それで私の気が楽になる」

助かったとはいえ、自分のせいで俺に大怪我を負わせた責任を取りたいってことか。

「……わーったよ、但し無理だけはするなよ」

「ああ、私は今のお前と違って『普通』だからな」

神様の借家になった俺は普通じゃないってか。

まあ、確かに常識的に考えれば異常事態だけどな。

「……冗談だ」

背まで伸びた長い黒髪を靡かせながら口元に笑みを浮かべる葵。心程じゃないが、こうしてみると葵も髪が長いな……って、そん

なこと言ってる場合じゃねえ！

「で、だ。心……これからどうすんだ？」

「あ、はい」

これまで俺と葵の会話を黙って聞いていた心へ話を振る。

多分、勝手に会話に混ざるのは失礼とか考えていたんだろうけど、問題の中心が黙ってちゃ話が先に進まないだろ——って、その前に。

「ああ、悪い。もう降りていいぞ」

「あ、はい」

許可を得た瞬間、すとん——と椅子に着地する心。

「実は、ずっと浮いてるのは結構しんどいんですよ」なんて笑顔で言いながら、横目でそつと葵の様子を伺っている。

これは想像だが、俺を巻き込んだことを葵が怒ってるんじゃないか……みたいなことを考えてるんだろう。俺に言わせれば無用な心配だけどな。

「……で、どうすんだ？」

「はい。えつと……とりあえず、これから敵の襲撃に備えた準備をしようと思います。今の状態で戦闘を行うのはなるべく避けたいですから」

「ふむ。……話に割り込んで申し訳ないが少しいいか？ ココロちゃんに聞きたいことが——」

「もう！ 葵さんまで、ココロちゃんって呼ぶの止めて下さい！——せめて、心と呼んで下さい！」

流石に、アニメのキャラの名前で自分のことを呼ばれるのは恥ずかしいらしい。

それが証拠に、先程からココロちゃんと呼ぶと人が変わったように怒り出——

「全く、『マジカル天使 ココロちゃん！』の主人公のココロちゃんに失礼じゃないですか……！」

——前言撤回、怒りのベクトルが微妙に違っていた。

「ふむ。では、心……聞くが、依代を奪った相手に本当に心当たりはないのか？」

「……はい。この百数年、これと言った争いを起こした記憶はないです」

「確か、結界を破れるのはお前と同じ護神か死神くらいのものだと言っていたな。同属がお前の力を狙っているという可能性はないか？」

「有り得ません。私達の力……特性は個人によって異なります。炎と水が共存できないように、他の三人が私の力を手に入れてもまともに使えませんよ」

「では、死神は？」

「ないこともないと思いますが……可能性は低いと思います。死神と私達は根本的に『違う存在』ですから」

「違う存在？」

「神様の種類が違うってことか？」

まあ、確かに護神と死神じゃ、『神』という名が付いていても別物っぽいけど。

「私達の役割は、先程お話した通り、星や命……つまり『生』を護ることです。対して死神は、命を狩り、死者を送る……文字通り『死』の神ですから」

「……命を狩るって、俺達人間を殺すってことか？」

「はい。星が、命の許容量をオーバーしないように彼らは生物を殺すんです」

「……どういうことだ？」

「つまり、星に存在できる命には限りがあるということさ。おそろく、それを超えると星は命の重さに耐えられなくなるのだろう。……だから、死神は生物を殺して命の数を減らす」

「？」

「えっと……今、一騎さんの乗ってるベッドに私や葵さんが乗ったらどうなりますか？」

どうもこうも、女の子二人乗せくらいじゃ何も変わらないだろう。

「じゃあ、そのベッドにこの病院全ての人間が乗ったらどうなりますか？」

「そんなの……」

「壊れちゃいますよね。重さに耐え切れずに……」

「ベッドは星で、乗っている人間が命か。例えば上手いな、バカでもわかる」

「うっせーよ」

つまり、ベッドが壊れないように上に乗っている人間を殺すってことかよ。

確かに、星を護るためにはそれ以外に方法がないのかもしれないけど、どんな理由があろうと人を殺すのに納得なんか出来ねえぞ。

「納得できないという顔だな。まあ、それは置いておけ」

「……わーってるよ。今は関係ねえ」

「えっと、簡単に言いますと……私達と死神は性質が真逆なので、

私の力を欲しがるとは思えません」

確かに、護ると殺すは正反対だ。

俺も死神が生命を司る神の力を手に入れようとするは思えないな。

「……話が少し逸れるが、死者を送るといふのは成仏させるということか？」

「はい。死神は死者の魂を成仏させ転生させるのも仕事です。ただ殺すだけでは、魂は『この世』に残りますから『あの世』である輪廻転生の輪に送るんです」

輪廻転生の輪ね。さしずめ天国と地獄って所か。

「……つまり、死神が魂を『あの世』とやらに送らない限り、死者の魂はこの世に残り続けるということか？」

「はい。死者の魂を向こうに送れるのは死神だけです。私達、護神でも死者の魂を導くことはできません」

管轄が違っただけか。神様も万能って訳じゃないんだな。

まあ、神様が全知全能なんてのは人間が勝手に考えた妄想でしかないんだし、現代でこんな神様のシステム知ってるのは世界でも俺達くらいのもんだろう。

「……ふむ」

質問は終わりだと言わんばかりに、腕を組み顎に右手を添える。

葵が何か難しいことを考える時の癖だった。

これが出る時、大抵、葵は俺達なんかじゃ想像もつかないことを考えている。あらゆる可能性、どんな小さなことも視野に入れて頭を働かせているのだ。もしかしたら、今の会話に何か思う所でもあ

ったのかもしれない。

——だが、その答えが葵の口から出ることはなかった。

「——ッ！　なんだ!？」

一瞬のことだった。部屋の——否、病院内の空気が変わった。痛いというかピリピリとした感覚。今まで感じたことのない未知の感覚が俺に襲いかかっている。

「……ふむ。私の気のせいではなければ、空気が変わったか？」

「ああ、何か嫌な感じた」

どうやら、葵も同じ異変を感じ取ったようだ。

一見、表情に変化はみえないが、眉間に少し皺が寄っている。原因は大体予想が着く——それは葵も同様だろう。俺達は同時に心の方へ向き直った。

「これは……結界です。病院全体に何者かが結界を張ったようです。体性のない普通の人間は時が止まるだけの簡単な結界ですが……」

やはり、予想通り。これは敵の襲撃だ。

とすれば、まずい。俺だけならまだしも、ここには葵が居る。何とかしてこの場から彼女を逃がさなければ——

「一騎……おそらく手遅れだ。私を逃がそうとか考えているなら、この危機を乗り越えることに頭を使え」

「そうですね。一騎さんには申し訳ありませんが、葵さんには付き合ってもらっしか無さそうです」

だが、俺の思考を先読みしたかのように——事実、心は俺の思考が読めるのだが——二人は、既に覚悟を決めていた。

「やはり、葵さんは素質があるみたいですね。結界内で動きが止まっていないのが証拠です」

「喜ぶべき所ではないな。この状況では、その他になっっていた方が安全だっただろうに」

とはいえ、引く気は欠片もないがな。と強気な態度。

「葵さんの周りに結界を張ります。少なくとも、この程度の結界しか張れない術者が相手なら突破されることはありません」

「つまり、その間に俺達で結界を張ってる術者を見つけて倒す訳か」

葵の身の安全が保障できるのであれば、とりあえず俺に文句はない。

まだ相手は何も仕掛けて来ていないが、結界を張って傍観ということはないだろう。そう遠くない内に何か仕掛けてくるはずだ。

待っていても後手に回るだけ、不利な状況を打開するにはこちらから打って出るのが一番いいだろう。

「先手必勝だ！ 行くぞ心——って、心……？」

気付けば、目の前に居たはずの心の姿が消えていた。周囲を見渡しても、その姿は発見できない。

『……です』

声は頭に直接響いた。同時に、何やら身体に温かいものが宿っているのがわかる。

『今の私が力を使用するには、依代の中に入らないと駄目なんです。まあ、アニメで言う合体みたいなものですよ』

つまり、心は俺の中に居る訳か。

けど、どうするよ？ 確か、お前ももう残りの力が少ないって言うてたし、いくら合体しても力が回復するわけじゃないんだろ？

『葵さんに結界を張って、一騎さんの身体能力を強化します。でも、余力がないので強化してられる時間は十数分って所です』
「……時間をかけるなってことか」

そう呟いた瞬間、淡く身体が輝く。

正直、あまり実感はないが、どうやら強化とやらは上手く発動したらしい。

葵の方を見ると、その身を覆うように綺麗な金色の光が葵を護っていた。

確かに結界の強度はの方が高そうだ。素人目にも、病院に張られた結界は心の張った結界より質が低く脆いのがわかる。

『葵さんの結界の方に力を結構使ったので、サポートはあまり期待しないで下さい。私が護る——とか、偉そうなこと言ったのに申し訳ないんですが……』

「状況が状況だ。文句を言うつもりはねえよ」

『すみません……』

「謝るなって。お前は何も悪いことはしてない」

むしろ、俺より葵を優先して護ろうとしたのは正しいことだ。

もし、コイツが自分の都合のみを考えて葵を見捨てようものなら、俺は契約を破つてでもコイツに反抗したかもしれない。

「勝ちやあ……問題ねえんだろ？」

『はい。こっちの準備は完了です』

「よっしゃ、今度こそ行——」

——行くぜ！　と言う前に、病室の扉が勢い良く開かれた。

第三話 キョンシー軍団大行進

雪崩のようにという表現が正しいだろう。

こちらの出鼻を挫くように勢い良く扉から入ってきたのは大量の人間達だった。

一見ただけでも十人以上居る。扉の向こう側にも居ることを考慮すれば三十人はいるだろうか。

「まずいな。部屋の中では退路がない……」

葵が苦々しい顔でそう呟く。

だが、心の境界があれば、とりあえず彼女の身の安全は保障できる。後は、俺達がどうやってこの状況を乗り切るかってことだ。

『……キョンシーですね』

「きょんしー？」

何だそれは？ 何かの魔法の名前か？

「キョンシー……中国に伝わる妖怪の一種だ。わかりやすく言うと吸血ゾンビみたいなものだよ」

そういえば、映画でそんなのを見たような気がしなくもない。

「でも、何でコイツらがそのキョンシーだってわかるんだよ？」

「全員、両腕を前に突き出しているだろう？ キョンシーは死体だから死後硬直で間接が曲がらないのさ。だから、バランスを取るた

めに腕を前に出す。それに部屋に入ってきた時、両足を揃えて器用にピョンピョン跳ねていたしな」

『それとキョンシーの額についている紙を見てください』

「紙？」

見れば、目の前のキョンシー達の額には何やら紅い文字みたいなものが書かれた紙が張ってある。

『呪符です。あれでキョンシー達を操っているんでしょう。本来、キョンシーに意思はありませんから』

「じゃあ、あの紙を取っちゃえば良いのか？」

『いえ、あの紙は操作のためのものですから。むしろあの紙を取ったら無差別に行動して手に負えなくなります。結界内に居る他の人達に被害が行く可能性がありますね』

「ならどうすりゃ……ッ!？」

どうすりゃいいんだよ!？ と、言う前に敵に動きが起こる。

流石に、いつまでも話をさせる気はないらしい。キョンシー達は一斉に俺達の居る方へと向かって跳んできた。

『キョンシーに傷をつけられると毒素でキョンシーにされます! 怪我だけはしないで下さい!』

無茶言ってくれる。コイツら地味に動きが早いんだぜ。

「って、避けれる？」

思っていた以上に、身体が動く。普段の倍は早く動いているのではないだろうか。

前から飛んでくる単調な攻撃をかわし、周囲を確認。一対多数な

以上、下手に動けばあつという間にお陀仏だ。

『これは、マズいですね。どんどん増えてます……』

心の言う通り、部屋の中にいるキョンシーの数は少しずつだが増えていた。

強化のおかげで攻撃は対処できているものの、囲まれてるこの状況をどうにかしないとジリ竄だ。

「葵！」

「大丈夫だ。心の結界は優秀だよ」

見れば、葵に襲いかかろうとしたキョンシー達は結界に弾かれている。

けど、結界があるとはいえ、そこまで余裕の表情が出来るお前はやっぱり格好良いよ。

「ってか、こつちも結界を張れば良いんじゃない？」

『強化と結界でMP切れです！』

「回復の薬が欲しい！」

思えば、今日コイツは俺の怪我を治すのに力を使っちゃってる。

その上、俺の強化と葵を護るための結界まで使ったら力尽きて当たり前だ。

「ってか、コイツら硬えぞ」

とりあえず、回避してるだけじゃ埒が明かないと思って殴ってみたが、死体だからかどうかはわからないがやけに硬い。

倒れてもすぐ起き上がってくるし、あまり攻撃も効果がないみた

いだ。

逆襲とばかりに向かってくるキョンシーの群れを受け流しながら、反撃して隙間を作る。

ダメージは与えられないにしても動く隙間を作らないと、このままじゃ押し潰されちまう。

『一騎さん！ キョンシーの弱点を突きましよう！』

「弱点？」

『キョンシーは鏡に弱いんです！ 鏡を盾に部屋から追い出しましょう！』

「この部屋のどこを見れば鏡があるんだよ！？」

『じゃあ、火です！ キョンシーは吸血鬼に近い性質ですから火に弱いんです！』

「この部屋のどこに火があるんだよ！？」

『一騎さん、魔法とか使えないんですか？』

「使えるわけねえだろ！」

変な漫才させるなよ。ただでさえ、一杯一杯なんだぞ。

っていつか、何か段々キョンシー達の動きが早くなってきたような気がするのはいけいか？

「一騎！ キョンシーは時間をかけると硬直が徐々に解けていく。

そのうち普通の人間のように動き出すぞ」

「って言われても、殴っても蹴っても効いてないんだぜ！？」

左右から向かってくるキョンシーを蹴っ飛ばして、ベッドの後へ逃げる。

後は窓だ、完全に退路が絶たれた。これ以上は逃げ切れないし、避けられない。

「誰も真正面から戦って勝てとは言っていない！ お前達の力があれば、いくらでも対応できるんじゃないのか？」

「俺の治療と強化、結界でMP切れた！」

「ってか、MPって言い方するとマジでゲーム気分だ。」

「とはいえ、力の残量とか言うより言い易いし、心もMPって言い方してるから特に正式名称はないんだらうけど。」

「って、そんなことどうでもいいんだよ！ おい、心……この状況どうすんだ！？」

「……術者を探すしかないでしょうね」

「術者？」

「このキョンシーはおそらく病院の死体を使ったものです。硬直が治っていない所を見ると作ってまだあまり時間が経ってないのでしよう。この手のキョンシーは術者を倒せば、体内の魂が抜けて元の死体に戻るはずですよ」

「術者を探すって言うてもよ……」

「探すにしろ、逃げるにしろ、この状況を突破しなきゃ始まらない。攻撃は効かないし、数は多い。窓から逃げようにもここは3階だ。」

「……あくまで私の推測だが術者は結構近くに居ると思うぞ」

「何でさ？」

「これだけの数のキョンシーを遠隔操作するのは難しいだろう。近くの方が操作にかかる負担は少ないはずだ」

「そうですね。少なくとも同じ階にはいるはずですよ」

「探知できないのか？」

「MPが足りません……」

「回復の薬が欲しい！」

後々聞いたことだが、心曰く、結界はかなりMPを消耗するらしい。

それも万が一がないように強度を極限まで上げているため、消費する力も通常の数倍という桁外れのものだと言う。そのおかげで葵に危険がないのだから俺としては問題ないが、このピンチを打破できる可能性が減っているのは現実として大問題だった。

『こうなったら仕方ありません……残ったMPで必殺技を使います！一度しか使えませんから、その際に部屋を脱出して下さい！』
「必殺技！？お前、攻撃技は使えないって言ってなかったか？」
『ふふふ、正確には対キョンシー用の必殺技です。今、思いつきました』

「不安しかねえ！」
『なんでですか！？』

今思いついたとか、不安要素以外に何がある！

「……話は良くわからないが、何とか出来るなら急げ一騎。このままでは、キョンシー達に縋り殺しにされるぞ」

結界を突破できないと判断したのか、室内のキョンシー達は全部俺達の方に向かって来ている。

確かに、今はまだ対処が出来ているが、これ以上動きが早くなったらそれも怪しい。

「でも、効かなかったら一気にやられるぞ！？」
『大丈夫ですよ！』

「……その自信はどこから来るんだよ」
「心が自信あると言っているのなら、今はそれに賭けるしかないだろう。どの道、このままじゃやられるのは時間の問題だ」

少し引つかかる物言いだが、確かに葵の言うことは最もだった。賭けに出るには些か早い気もするが、他に手がないのもまた事実。それと、これは後々わかったことだが、どうやら心が俺の中に入ると外に居る人間には声が聞こえないらしい。

だから葵も『心が自信あると言っているのなら——』などと、遠まわしな言い方をしていたのだ。

俺が葵の言葉に引っかけりを感じたのもそれが原因だったのだが、現時点の俺はそれに気付いていなかった。

とはいえ、それは当然のことだ。葵は俺の声を頼りに会話を予測して話に混ざっていたのだから。

思い返してみれば、確かに葵と心と直接的な会話こそしていなかったが、こんなにスムーズな会話されたら気付いて言う方が無理な話だ。

「まあ、確かに文句言ってられる状況じゃねえか……心、頼む！」

『はい。一騎さん、手を上に突き出して下さい！』

こうなりや、一か八だ。目の前に群がるキョンシー達を蹴り飛ばし、両腕を上に突き出す。

『——いきますよ！これが必殺のシャイニングフィンガーです！』

——そう叫んだ刹那、突き出した俺の両手が眩い光を放つ。

あまりの眩しさに目を開けていられず、思わず目を瞑ってしまった。

それは葵も同様らしく、目を瞑る前に見た時はこちらから視線を外していた。

『今です！一騎さん、部屋を脱出しますよ！』

声に反応して目を開けると、目の前――否、室内に居たキョンシー達は一体残らず身体が燃え上がっていた。

余程の苦しみなのか、こちらに攻撃していたキョンシー達も呻き声を上げながら混乱しており、今までのような統率が取れていない。

「……何したんだ？」

『説明は後です！ 早く、脱出して下さい！』

「お、おう！ ちよっくら行って来る！」

「……待つてるから、早く倒して来い」

そんな葵の言葉を背に、バラバラに動くキョンシー達を掻き分けて部屋を脱出する。

部屋の外に居たキョンシー達は、先程の現象を回避していたのか、普通に俺達を襲ってきたが、室内よりも数が少ない上、廊下がこれだけ広ければ如何様にも対処できた。

攻撃を受け流し、蹴り倒し、廊下を走る。

「で、さっき何したんだよ？」

『たいしたことはしていません。太陽光を擬似的に再現しただけです』

「太陽光？」

『ほら、さっきキョンシーは吸血鬼に性質が近いって言ったじゃないですか』

言ったか？ ああ、そういえば漫才してた時にそんなこと言ってたっけ。

『吸血鬼は日の光に弱い。これは子供でも知ってます』

「性質が同じキョンシーも同じく日の光に弱いってことか」

『はい。ですから、日の光に当たると火傷のような症状が出たり、溶けたり燃えたりするんですよ』

「だから、身体が燃えてたのか……」

確かに、自分の身体に異常が起これば隙は出来る。

普通なら無理でも、強化した今の俺なら突破できるかもしれない隙が――

『上手くいって良かったです。まあ、もう完全にMP切れで使えませんけどね』

何だかんだいっても、ただの目くらましだからな。

キョンシーには効果絶大でも言うほど力を消費しないから、今の心でも使えたってことか。

とはいえ、それももう使えない以上、次に同じ状況になったら終わりってことだ。

『時間がありません。葵さんの結界はまだしばらく持ちますけど、一騎さんの強化は後十分も持たないと思います。早めにケリを着けましょう』

「わーってるよ」

でも、手がかりが何もないんじゃ探しようがないぜ。

とりあえず、強化で速度が上がってるおかげで、キョンシー達からは何とか逃げきれてるけど――

「――って、この病院廊下長くね？」

ふと気付いたことだったが、思えば異常事態だ。俺は今、走る速度が上がっているんだぞ。

しかも無駄話の最中、ずっと廊下を走り続けて突き当たりに着かないってどういうことだ？

『そういえば……』

心もこの違和感に気が付いたのか、何やら思いつめたような声を出す。

不穏な空気だ。もしかして、俺達はまたヤバい状況に陥ったんじゃないのか？

「何か、同じ景色が続いているような気がするんだけど……？」

『……もしかしたら、敵の罠に嵌ったのかもしれない』

「罠？」

『ほら、よくアニメとかであるじゃないですか。同じ場所をぐるぐる回らせる敵の妨害的なものが』

ただ単に長い廊下——っていうには、流石に長すぎる。

とすると、やっぱり心の言う通り俺達は罠にかかって迷子になっちまったってことが。

「……どうすんだよ？」

『どうしましょう……』

駄目だ。頼みの神様はMP切れで役に立たねえ。

とりあえず、適当な部屋に入ってみるか。何かわかるかもしれないし——

「って、あれ？ 扉が開かねえ……」

堅いとかそんな次元じゃない。マジでびくともしないぞ。

まるで、壁に扉の絵を書いたみたいに、開かないのが当然みたいだ。

『多分ですけど……この廊下そのものが異空間みたいなものでしょうから、脱出するには空間を破壊するしか手がないかと』

「どうやって破壊すんだよ？」

『一騎さん、超能力とか使えないんですか？』

「使えるわけねえだろ！」

っていうか、むしろその手のことはお前の分野だろう。

どうするんだよ？ 部屋が開かないってことは窓も駄目だろうし、打つ手がないじゃねえか。

『……いえ、そうでもないですよ。これだけの空間を外部から作り上げられるとは思えません。多分、術者もこの空間の中に居ると思います』

「ってことは、その術者を倒せば出られるってことか？」

『多分ですけどね。とはいえ、相手もそんなことは百も承知でしょうし、簡単に見つけられるとは思えませんけど……』

相棒はMP切れ、こっちも強化時間は残り七、八分って所か。

このままグダグダやってても髑り殺しにされるだけだ。術者が内部にいるという確証はないが、それでも見つけなきゃ俺達に勝ちはない。

とはいえ、心の力を当てに出来ない以上、地道に探すしか手はない。けど、そんなのはどう考えたって相手の術中に嵌ってるってことだろう。

「くそ……頭脳労働は俺の担当じゃねえんだよ」

こういう謎解きみたいなのは、どっちかというと葵の担当だ。

アイツがここに居てくれれば、何かヒントを見つけてくれたかもしれない。

けど、今は俺達しかいないんだ。二人でどうにかするしかない。とはいえ、俺にしてみればまだキョンシーを相手にしてた方が楽だ。こういう頭を使うパズルみたいな戦いは俺の性に合わない。

「せめて、お前のMPが残ってりやなんとかあったかもしれないんだけどな……」

『……………』

「……どうしたよ？」

『……いえ、何か変な音が聞こえませんか？』

音？ いや、特に変わった音は聞こえねえぞ。

目を瞑り神経を集中させて音を探ってみるが、やはりそんなもの聞こえ——いや、聞こえる。

「何だこれ、足音か？ それも一人二人じゃねえぞ」

『！ キョンシーが追いついて来たんですよ！』

「……マジかよ。いくら居空間とはいえ、俺達結構走ったぜ？」

『あ、ほら一騎さん。後ろ、後ろを見て下さい！』

振り返り、目を凝らす。確かに、まだ遠めで良く見えないが俺達が走って来た方向から何かが迫って来ている。

「でも、ピョンピョン跳んでないぜ？」

『死後硬直が解けて普通に走ってるんですよ！』

「……それってヤバくね？」

『とりあえず、逃げましょう！ また囲まれたらお終いですよ』

先程までは、キョンシーの動きが単調だったからあの数の攻撃を対処しきれていた。

だが、死後硬直が解け、人間と同じように動けるようになったあの数のキョンシーを相手に勝てる訳がない。最初は善戦できても、いずれは数の暴力の前に屈することになるだろう。

「こっちに探す暇を与えないつもりかよ！」

止めていた足を再び動かすが、強化を維持できる残り時間は約六分。

とりあえず、走っていれば捕まらないだろうが、こちらには時間がない。このまま逃げていても、いずれは強化も切れてどうしようもなくなる。

「MP切れの神様と、ただの人間でキョンシーと戦えるかな？」

『無理に決まっています！』

「ですよー」

一対一ならまだしも、相手はかなりの数だ。真つ向勝負になれば、何の力もない俺達じゃ勝機はないに等しい。

とすれば、俺達が助かるにはこの異空間を脱出するためにキョンシーを操ってる術者を倒す以外に道はないのだが、その術者がどこにいるのかわからない。

……あれ？ この状況、既に詰んでるんじゃない？

いや、待て待て。諦めたらそこで終わりだ。とにかく走りながら、どうにか対処法を考えるしかない。

とはいえ、残り時間は後僅かだ。せめて、制限時間がなければまだどうにでもなるが、残されてる時間は六分しかない。そんな短い

時間でこの状況を突破する方法を考えるとかどうやったって無理だ
ろ。

『……これは、少し無茶しなきゃ駄目ですかね』

「何とか出来るのか!？」

『あまり、気が乗らない方法ですけどね……』

正直、使いたくありません——と、心にしては珍しくキツパリと
難色を示している。

だが、追い詰められたこの現状でそんなこと言っていられる余裕
はない。

このままじゃ最悪死ぬかもしれないのだ。お前の力が当てに出来
ない今、可能性があるならそれに縋るしかないだろう。

『……仕方ないですね』

渋々と言わんばかりに口を開く。

心が提案してきたその方法は、確かにこの状況を打破できるかも
しれないものだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3617k/>

かみ かみ

2011年11月15日17時04分発行